

岡崎市議会議長 様

支出番号

会派名

公明党

代表者名

畑尻 宣長



下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政務活動旅行報告書

令和 2 年 1 月 7 日提出

活動年月日	令和 元年 11月 1日 (金)	
氏名	畔柳敏彦・畑尻宣長・野島さつき	
用務先 及び 内 容	1	用務先 東京都台東区
	11月 1日	内 容 隅田公園オープンカフェについて
	2	用務先
	月 日	内 容
	3	用務先
	月 日	内 容
	4	用務先
	月 日	内 容
備 考		



政務活動調査報告書

調査日	令和元年11月1日（金）
視察場所	東京都 台東区
調査項目	隅田公園オープンカフェについて
視察者名	畔柳敏彦、畑尻宣長、野島さつき
市の概要	面積：10.11 km ² 人口：198,073人 人口密度：17,727.20人/km ² 世帯：104,833世帯 経常収支比率：82.8% 実質公債費比率：▲0.3%

隅田公園オープンカフェは、都内初の民間事業者による河川敷地を利用したオープンカフェとして、平成25年10月に2店舗がオープンしました。開業から6年過ぎ、現状を視察してまいりました。



<目的>

隅田川の水辺とその周辺地域に恒常的な賑わいを創出し、地域の活性化を図る。

<経緯>

台東区は、東京23区部の中心より、やや東側に位置し、南は千代田区と、また神田川を隔てて中央区に接し、西は文京区、北は荒川区、東は隅田川を境にして姉妹区の墨田区に隣接しており、人口約198万人、面積10.11km²と23区で一番小さな特別区です。

江戸時代から庶民で賑わう上野や浅草といった東京を代表する観光地を有しており、隅田川のすぐ近くには浅草寺が建ち、雷門や仲見世、江戸町風の意匠で統一された町並みなど、平日でもたくさんの観光客で賑わっています。また浅草は、浅草寺の初詣から始まり、三社祭、隅田川花火大会、浅草サンバカーニバル、東京時代まつりなど一年中、多くの人が集まるイベントが開催され、年間を通して賑やかで活気溢れる街です。

隅田川の対岸に東京スカイツリーの開業（平成24年5月）を見据え、台東区では、水辺の活性化施策の一つとして、隅田公園にオープンカフェを設置する計画が立ち上がり、庁内で検討が始まりました。隅田公園は、



桜の名所でもあり、徳川八代将軍吉宗が植樹したといわれる桜の花ごしに、東京スカイツリーの全景が望める絶好のビュースポットとなります。

また、河川敷地占用許可準則の改正による規制緩和や、「2020年の東京」への実行プログラム（東京都）の施策である「隅田川ルネサンス」とその実現プロジェクトである「水と緑のネットワーク」に台東区の事業としてオープンカフェの設置が位置づけられたことも、大きな推進力となり、計画が進められました。

平成23年3月には、利用者等へのニーズ調査を行うオープンカフェモデル事業を実施したところ、20歳代～70歳代まで幅広い年代に利用されており、年代を問わず水辺のオープンカフェが受け入れられることがわかりました。



<近隣住民との意見交換>

平成23年2月、オープンカフェモデル事業の実施にあたり、近隣住民に対する説明会を開催。参加住民の多くから「公園内に店舗ができると街区からの眺望が妨げられる」「食べ残しのゴミなどが散乱する」「酔客による騒音が心配だ」などの反対意見が続出。

継続的な話し合いの場を設け、1年以上にわたり意見交換会を重ねていくうちに、住民側も自主的な検討会を組織し、近隣住民の中での話し合いも行われ、しだいに建設的な意見も出されるようになってきました。

平成24年3月、近隣住民の検討会から、区に要望書が提出されました。

①店舗建物に関することとして、外観や高さ、開放感をもたせることなど。

②運営方法に関することとして、営業時間、アルコールの提供やテイクアウトによるゴミの発生など。

③運営事業者に関することでは、既得権化の防止、駐輪対策、衛生管理や地元町会への協力など。これらの要望を受け、都市・地域再生等利用区域指定要望書の内容や出店者募集の条件等を検討する協議会を設置することになりました。

隅田公園オープンカフェ協議会

隅田川の水辺とその周辺地域に恒常的な賑わいを創出し、地域の活性化を図ることを目的に整備するオープンカフェ等について検討する協議会

学識経験者、地元住民の代表、台東区商店連合会、浅草商店連合会、浅草観光連盟、浅草料理飲食業組合の各代表、税理士、台東区議会議員、河川管理者（東京都建設局河川部・第六建設事務所）及び台東区職員で構成する23名

出店者選定委員会

公平性や透明性、客観性等に留意し、出店者の選定を行う選定委員会

学識経験者、地域住民の代表、台東区職員等で構成する9名

隅田公園オープンカフェ運営連絡会

隅田公園オープンカフェの運営について、地域と協働しながら良好な水辺空間の保全と周辺に恒常的な賑わいを創出し、地域の活性化を図るため、協議会とは独立した団体として設置。

学識経験者、地元住民の代表、台東区商店連合会、浅草商店連合会、浅草料理飲食業組合の各代表、河川管理者（第六建設事務所）及び台東区職員で構成する13名

<隅田公園オープンカフェ協議会における検討>

台東区では近隣住民からの要望

を受け、平成 24 年 7 月、「隅田公園オープンカフェ協議会」を河川敷地の利用調整に関する協議会として設置し、協議会での議論のなかで、地域の合意形成を図りました。

<事業者の募集から決定まで>

平成 24 年 12 月 10 日・・・公募開始

平成 25 年 1 月 24 日・・・応募書類の提出締切 6 事業者が提出

2 月 4 日・・・選定委員会による二次審査

2 月 5 日・・・出店事業者決定

タリーズ社＝国内カフェ業界での実績や公園立地への出店意欲、水辺を活かした活性化の提案などが評価された。

松竹サービス社＝浅草地区に密着した着地型観光開発に取り組んでいる事業者と連携して、カフェの店舗を水辺と街をつなぐハブとして、地元団体とも協働し、浅草全体の活性化を提案していることが評価された。

各事業者から提案のあった「地域還元費」は、運営連絡会に寄付金として納められ、その資金は地域活性化のために使われる。

<隅田公園オープンカフェの誕生>

平成 25 年 10 月、東京都の管理河川では初となるオープンカフェが誕生。

『タリーズコーヒー隅田公園店』

「エコと防災、観光の基点に」をコンセプトに、店内では無料公衆無線 LAN を使うことができ、デジタルサイネージで観光情報を提供、だれでもトイレや AED を設置し「災害時帰宅支援ステーション」として災害時にも活用できる。

『CAFÉ W.E』

「Wall for Every one」をコンセプトに、「まち」と「ひと」をつなぐコミュニケーション創出型展示スペースを設け、飲食だけではなく、展示物による情報を発信・共有することで新たなコミュニケーションを創出するカフェを目指す。



<今後の課題>

- ・ 1, 2 年目は利用者にアンケート調査を行っていたが、それ以降調査していない。結果は概ね好評であったが、知名度の低さが上げられた。
- ・ 両店舗はそれぞれにアンケートを実施しており、満足度は高めである。
- ・ 各店舗の売り上げ向上のためには、リピーターを増やすことに力を入れ、住んでいる人が楽しんで、足繁く通う場を目指したい。
- ・ インスタ映え、写真に撮ってかっこいい場所にしていく。



<所 感>・・・畔柳敏彦

東京都台東区では平成25年10月に東京都の管理河川では初めてとなるオープンカフェが開設された。平成22年当時に建設中のスカイツリーが東京タワーの高さを超えたころから、人通りの少なかった隅田川沿いはスカイツリーが見えるビューポイントとして、多くの観光客が訪れるようになり、オープンカフェ予定地も公園整備で展望広場ができたことにより多くの人がスカイツリーの見物に集まるようになってきた。この年までに浅草地区の観光客は2,492万人であったが、平成24年にスカイツリータウンが開業すると年間約4,500万人の観光客が来訪するようになった。オープンカフェが開設されるまでにはさまざまな難題があったが、追い風も吹いたようである。それは東京都が「2020年の東京」への実行プログラムの施策である「隅田川ルネサンス」とその実現プロジェクトである「水と緑のネットワーク」に台東区の事業としてオープンカフェが位置づけられたことが大きな推進力となった。

また、平成23年4月に河川敷地占用許可準則の改正により、河川管理者が協議会等で地域の合意を図った上で、区域、占有施設、占有主体をあらかじめ指定することにより、特別措置の内容を全国で実施可能となったことが、隅田公園オープンカフェの開設に拍車がかかることとなった。そしてオープンカフェ開設予定地から200mほど下流の隅田公園内で仮設店舗を2区画出店し様々なメニューを提供しながら利用者ニーズの調査をしたところ、「以前からこのような場所があればよいと思っていた」、「セーヌ川の畔のようなイメージがある」、「スカイツリーを見ながらというのが気に入った」などの好評価が寄せられた。

そして肝心の「地域の合意」について説明会を開催したところ「公園内に店舗ができると街区からの眺望が妨げられる」、「食べ残しのゴミが散乱する」など反対意見が続出したため説明会は一旦中止。しかし、「地元との合意形成」を図らねばオープンカフェが設置できないため、地道な住民との話し合いを継続した結果、住民側も自主的な検討会を組織し、近隣住民の中で話し合いがもたれ建設的な意見も出るようになってきた。平成24年近隣住民の検討会から「河川敷地の利用調整に関する協議会」で検討してほしい事項がまとめられ、区に要望書が出された。その後、「隅田公園オープンカフェ協議会」が設けられ住民からの要望書の内容をできる限り尊重した形で募集要項をまとめ上げて地域の合意形成を図ることができた。また、マーケティング調査を行い採算ベースにのる結果が出たため、カフェ事業者にヒアリングを重ね2区画2店舗で募集をかけることにした。応募6社の中からタリーズコーヒージャパン株式会社、株式会社松竹サービスネットワークが出店することになった。また、募集要項に基づいて、各事業者から提案のあった「地元還元費」が運営連絡会に寄付金として納められ、その資金は水辺や地域への還元、地域活性化のために使われる。税法上問題がないと東京国税局に確認を取っているそうです。本市も今後、QRUWA 戦略内のルートにオープンカフェを開設される予定や公民連携事業として稼げる民間事業者の進出等あることが予想されるが「地元還元費」は魅力ある財源になるかもしれない。以上の内容を振り返ると1つの事業を実現化するためにはいかに誠実に粘り強く住民の合意形成を図るかがどこの自治体でも課題であることがわかりました。しかし、合意形成を図った後には大きな結果が残せるのだということも実感した今回の調査となりました。

<所 感>・・・畑尻宣長

台東区が進める観光施策の中のひとつに、隅田公園オープンカフェがあります。かわまちづくりの参考にすべく視察して参りました。もともと、台東区の観光として浅草があり、年間観光客数は、5,583万人（H30）、そのうち外国人観光客数は953万人の方が訪れています。また、観光関係団体も5団体あり、それぞれの特徴など調整も必要ではないかと感じてしまいました。そういった観光、来訪して頂く下地があるうえで、隅田公園オープンカフェが誕生しました。目的としては、隅田川の水辺とその周辺地域に恒常的な賑わいを創出し、地域の活性化を図るというものです。平成25年10月に2店舗オープンするに至りました。場所は、浅草駅徒歩6分に位置し、絶好のスカイツリービューポイントにあります。この場所に設置するにあたり、河川敷地占用許可準則の改正があります。ここの許可がなければ、設置は不可能です。ここで、河川占用許可を得るにあたり、借りる側からすると、河川区域としての使用料、公園区域としての使用料と、ダブルに払わないといけないにも関わらず、6社の応募があり、地元住民も入ったの1次2次審査が行われて選ばれました。

しっかりした事業スキームを組みながら、着実に進めてきた結果であります。地元住民の理解も重要であると思いました。本市を見ても、観光客に来てもらいたい、しかし、うるさいだの、ごみが散乱しているなどと、必ずしも肯定的ではない方もみえます。このオープンカフェにおいても同じようでありました。以前から住んでいる住民と、安住を求めて移り住んでくる住民との感覚の差があったようであります。そのあたりを、事前にキャッチし、時間をかけて話し合いをして解決に導いていました。さらに、事業者選定にも加わってもらうことでも、意識は変わると感じました。

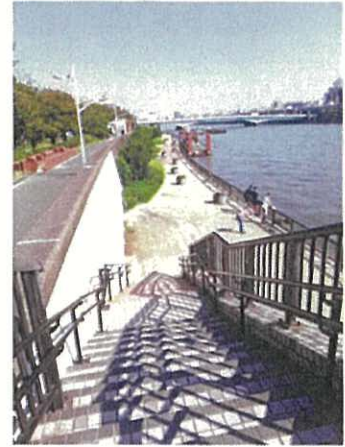
ポイントとなるのは、隅田公園オープンカフェ協議会、隅田公園オープンカフェ運営連絡会の存在ではないかと思いました。協議会の方は、地元住民、議員も交えて、現場の意見を取り入れる工夫がされていると思えますし、運営連絡会は、運営について地元住民、各種団体代表などで、地域と協同しながら良好な水辺空間の保全と周辺の恒常的な賑わいを創出し、協議会とは独立した団体として設置されています。役割を明確化することで、おのずと目指すべき方向も決まっていくのだろうと思えます。形だけになりがちな協議会、運営連絡会ですが、アンケート調査を行ったり、来場者人数の向上に向けた話をするなど工夫を凝らしていると感じました。また、対岸との回遊性も考慮した動きも気になりました。設置することも重要ですが、その後の対応も大変参考になりました。

本市でいうところの乙川リバーサイド、Quruwa戦略にどう結び付けていくのか、かわまちづくりとして、こういった「あったらいいな」が実現できるような施策を提案していきたいと思えます。

<所 感>・・・野島さつき

隅田公園オープンカフェは、浅草駅から雷門、仲見世通り、浅草寺にかけてのごった返すような人波とは違い、スカイツリーがよく見える都会のおしゃれなウォーターフロントでした。水辺の景色を楽しみながら散策できる遊歩道もあり、ちょっと休憩するにはちょうど良いカフェです。

平成 20 年、隣接する墨田区押上地区で東京スカイツリーの建設が始まる前の浅草の観光客数は約 2,063 万人でした。台東区では、年間数千万人といわれるスカイツリータウンを訪れる人々をいかに区内へ回遊させるかを検討し、これまでに、スカイツリーへの誘導案内板の設置、スカイツリーのビュースポットとしての隅田公園の整備、オープンカフェ予定地の直下に新しい防災船着場を建設し平常時の観光への活用、東京芸術大学及び墨田区と連携し、隅田川沿いにアート作品を設置して回遊性を高める取り組みを進めてきました。平成 22 年 3 月、建設中のスカイツリーの高さが東京タワーの高さを超えた頃から、それまで人通りが少なかった隅田川沿いは、スカイツリーがよく見えるビューポイントとして、多くの観光客が訪れるようになり、オープンカフェ予定地も公園整備によって展望広場ができたこともあり多くの人がスカイツリーの見物に集まるようになりました。さらに、東京都の施策である「隅田川ルネサンス」で隅田川の賑わい創出に向けた取り組みが始まり、河川敷地占用許可準則の改正による規制緩和で、河川敷地において、地域の合意形成を前提に常設のオープンカフェ等、民間事業者による営業活動が可能となり、隅田公園オープンカフェ開設に大きな拍車がかげられることとなりました。



地域の合意形成を図る必要から、住民との話し合いを重ね、当初は反対意見が多かったものの、1年以上にわたる継続的な話し合いの中で、住民側も自主的な検討会を組織し、しだいに建設的な意見も出されるようになってきました。検討会から出された要望を受け、都市・地域再生等利用区域指定要望書の内容や出店者募集の条件等を検討する協議会を設置することになりました。協議会での議論の中で、住民からの要望書の内容をできる限り尊重した形で募集要項をまとめ上げ、地域の合意形成を図りました。

2 店舗が開業して 6 年が経過し、今ではリピーターも増え地元の皆さんの憩いの場所となっています。各事業者から提案のあった「地域還元費」が運営連絡会に寄付金として納められ、地域活性化のために使われています。また、事業者は町会へも加入し、地元町会活動や毎月 1 回近隣の通りを清掃する大江戸清掃隊の活動にも参加しています。今後は、オープンカフェの知名度を向上し、各店舗の売り上げを向上することが課題だそうです。

本市においても乙川リバーフロントに岡崎城を眺めることができる常設のオープンカフェの開設を期待しますが、観光客優先ではなく、住んでいる人が楽しむ空間であること、地元町内会との良好な関係づくりが大事と感じました。地元の皆さんの合意形成のために、しっかりと時間を掛けて意見交換をし、観光客にも市民にも憩いの場となる施設ができるよう検討して参りたいと思います。

以上